

所有管理者 毛利家（理当主 毛利高棟氏）東京部三鷹市居住  
創設築年次 寛永十四年（一六三七）創築  
享保十一年（一七二六）修築  
天保三年（一八三二）修築

構造・型式

檜門（葺檜門）

下見板張 西平出格子 切妻庇付

両妻引戸出入口付 屋根本瓦葺

規模

梁行 四・三四尺（二間）

桁行 九・九六尺（五間）

総高 八尺

門部高 二・八尺

（以上）

随想

佐伯氏と元寇

〔私の歴史散歩〕

会員 佐 脇 貫 一

すべに、ご存知の方も多いように、私は長男が福岡市に  
居住しているため、しばしば福岡市を訪れ、その都度、  
ひまにまかせて長男の住んでいる香椎箱崎地区の史跡  
旧趾を尋ねまわっている。

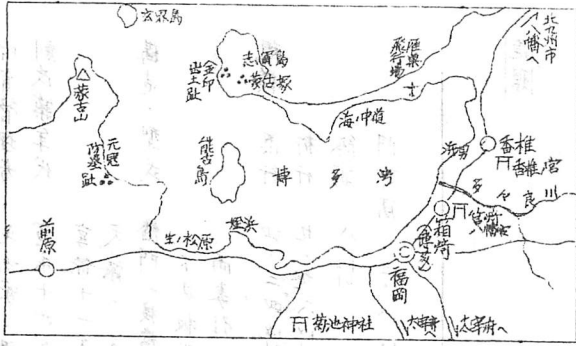
私の願いは、古代の奴才国（なれのくに）、難の具（な  
のすがた）であるといわれている那の津、博多の津、は  
遠の朝廷へとおのゝかど、といわれた大宰府の外港と  
て、九州ではもつとも早くひらけた土地であるから、豊

後の国とも深い関連があるはずだし、また豊後の一辺城  
である佐伯地方とも、何らかの歴史的なつながりがある  
だろう。その片鱗でもよいから見つけたいものだとい  
うことであつた。

某日、箱崎松原付近を散歩しているとき、九州大学農  
学部前で、元寇防塁跡と刻まれた碑を見た。そこは多々  
良川の支流宇美川にほど近い地点である。防塁跡で有名  
なのは、福岡市西区の百道海岸に近い、修猷館高校内  
にある石築地跡や、生の松原、今津海岸に残っている防塁  
跡であるが、箱崎のものには西鉄沿線の堤防といつた土塁  
跡である。

文献によると、元寇の防塁は今津の海岸から、香椎に  
いたる約十四キロメートルにわたつて築かれていたとい  
われ、「説に日宗像、津屋崎まで延長されていたとい  
この高さ約二メートル、底の幅約三メートルの大石築地  
は、九州各地のご家人・非ご家人を総動員して、それぞ  
れに分担地域を割当て構築したと伝えられている。そし  
て筑前・筑後は博多の海岸、日向・大隅は今津・長浜と  
いうように分担がわかつていたが、豊後大友氏の分担し  
た地域はわからなかった。ところが昭和三十四年、杵築  
市生桑寺の大般若経の裏打ち版に使われた古文書に、豊  
後の石塁分担地が記入されていることがわかつた。つま  
り豊後大友氏がその領内のご家人をひきいて構築した防  
塁は香椎前浜であつて、当時大友頼泰の本陣は香椎宮に  
置かれたというのである。

その後私は、再三にわたつて香椎宮に詣で、香椎宮を  
中心にした地域に、防塁遺址と思われるものはないかと  
探して見た。元寇の防塁は箱崎松原で、当時の多々良浜へ多々良川  
と宇美川の合流点、松島という中洲があるに臨み、多



多良川河口一帯には榎杭が打ちならべられて、元軍の上陸を阻止する備えがなされていた。多々良川の右岸は香推松崎の丘陵、その前面に名島があり、そこから香推前浜となる。現在の香推浜野地区である。

私は国鉄香推駅近くで、廢社になつてゐる浜野神社の丘にのぼつた。この付近は一つの台地になつており、浜野神社の丘は古よつとした塊状の台地である。付近一帯は宅地化されて、神社跡だけが残つてゐるが、その一部はすでに削られてゐる。あらわれてゐる地層は人工的に構築された堆積地といふところである。この台地は浜野川に達しており、その川口に御島があるから、台地の前面、現在の香推商店街は前浜とよばれた海岸であつたにちがいない。さすれば、建治年間(一二七五-一二七七)に豊後ご家人が築いたてある香推前浜の防塁は、このあたりではなかつたか。私はしばしばこの丘上に立つて追憶にふけた。

佐伯氏も鎮西奉行大友氏配下の鎌倉ご家人である。おそらく佐伯弥四郎政直(惟直)も佐伯莊の地頭職大友兵庫入道(頼泰)の命によつて、この香推前浜で石築地構築の工事にあつたはずで、各ご家人の工事負担は、所領一町に一つ一尺といふから、政直はその所領百二十町分(佐伯水正)百二十尺、つまり二十間を分担したわけである。

文永十二年(一二七四)十月の

元軍襲来にあつて、佐伯氏が出陣したかどうかは不明だが、ご家人である以上、文永の役の前線に、佐伯氏の時期に、大友頼泰の下で「異國警固番役」をつとめたことである。

弘安四年(一二八二)六月の元寇にさいして、豊後から出陣したのは、大友頼泰の子親時をはじめ、詫磨、志賀、田原の大友一族、都甲、伊美、朝来野らの国東浦部衆、野上、小田、吉後、帆足らの玖珠清原一族、日田氏などが確認されており、佐伯氏の従軍をものがたる記録は何もないが、國をあげての防衛戦であるから、佐伯氏もどこかで、何かの役割りをつとめていたことである。

この後で大友氏は、箱崎・香推方面を守備したといわれるが、それは八幡悪童訓に「大友親時が手兵三十人をひきいて洲崎(海の中道という)から志賀島に攻めこみ、元兵を破つた」と記されてゐるからで、一説によると今津長浜方面を守備していたともいふ。

いま、香推駅付近にある耳塚・餓塚(ぐさきりつか)・兜塚(かぶとつか)などの古塚は、元寇の遺跡ではないだらうか。もつともそれを証するものはないが、立花山や名島城をつなぐ線にあるから、いつの時代かの古戦場であつたことにはまちがいないからう。

(おわり)

春めくや遠く鹿牟礼の脣を見る

春霖の時は妙におもしろき

若葉わかばみちそれぞれに輝きて

ひわ色にひかるや昼の稚わか葉

五 群

同

同

同